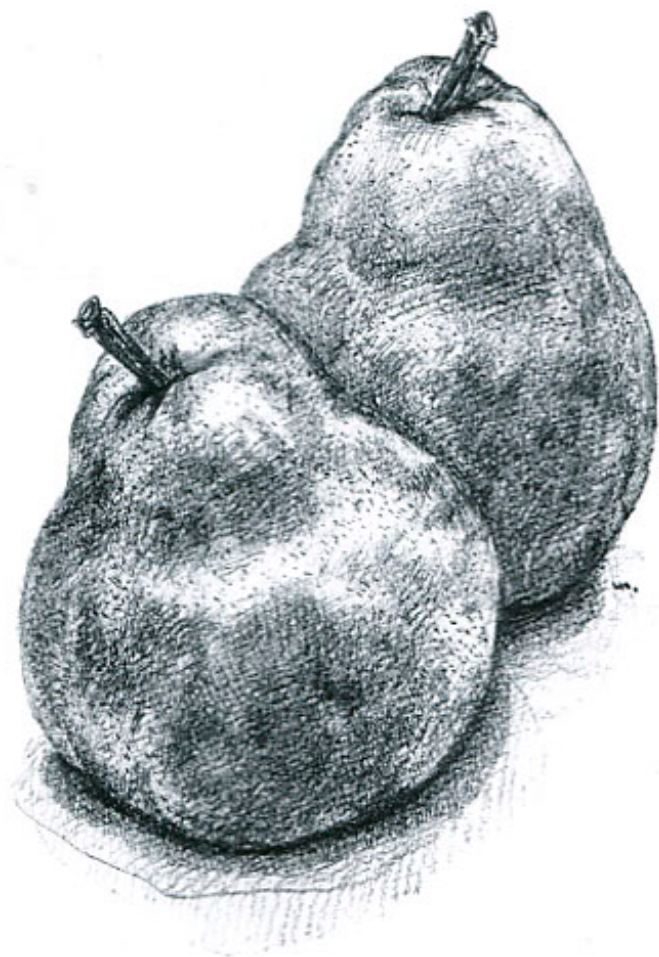


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻10月号(通巻615号)

風土



10

秋の星

神蔵器

秋立つや水に手が出て足が出て

水ばかり飲んで八月十五日

四畳半畳より秋立ちにけり

夜の秋たしかに妻とすれ違ふ

大鯉の跳ねし水音晩夏かな

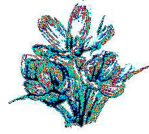
新涼の下駄に乗つたる足の裏
運ばれて閑伽に波立つ初嵐
日盛りのわが立つかぎり水流れ
火を焚いて一人に多勢盆三日
新盆や墓に一とひら紙の燃え
眠りてはたましひ離れ盆の過ぐ
秋の星山々は手をつなぎをり

悼
森澄雄先生



竹間集

同人作品



ほたるぶくろ

工藤ミネ子

竹落葉かさりと声のひつかかり
田草取る白の輝くかぶりもの
早苗饗の車座に僧引き込まれ
仏飯のまどかかなかな歌垣に
夏の山御稲荷様をふところに
ゆるやかに雲を目指せる巢立鷹
ほたるぶくろ鐘の重さとなりけり

月見草

柴田久子

くろがねの鎖となりて蟻の列
石段を下りて石段合歓の花
あをあをと火の島浮かぶ月見草
駅を出て街の匂ひの夕立かな
夕立の靖国通り歩きけり
切り岸の夕日にすがり蔦茂る
提灯をたたみ祭りの風を抜く

天道虫

中村洋子

たれ辛き四万六千日の蕎麦
古九谷の藍の深まる大暑かな
雲の峰膝わらふまで歩きけり
何回も手を洗ひをり半夏生
小児科の待合室の天道虫
水の噴くホースの継ぎ目大暑かな
炎天へ出て行く靴を揃へをり

赫 熊

橋添やよひ

三伏の川滾ちをり頼政忌
巴里祭の残りし父のカンカン帽
烏瓜咲かせ下京鉾会所
月鉾の雨を弾ける赫熊かな
合歡の花蕪村の母の与謝郡
むらさきははは恋の彩桔梗咲く
利休生家「ととや」を抜ける青田風

雲の峰行き

南 うみを

祭来と天神さんに瓦斯屋ぬて
船渡御を待つ欄干の笹鳴つて
雲の峰行高野山ケーブルカー
蓮咲いてまぶしき塔となりにけり
本山の濃き片蔭に誰も入る
滝音にちぎれかかりてご幣かな
かなかなのソプラノ声明のバリトン

白き巨船

島谷 征良

湖薄暑遊船の名のポパイ号
命日の墓参終へたり鉄線花
寝しづまる家一軒やとぶ蚩
時の日や教室の時計みな違ふ
神殿の裏は水鶏の叩く闇
立ち食ひの鮎の塩焼山を背に
五月雨に入り来る白き巨船かな

泉湧く

大竹淑子

菟採水の森 二句
山気満つ森のまほろば泉湧く
合歡咲くやくわんおんぼしの三歩まり
鉾立や洛中の雨大粒に
鉾建ての仕舞は月を飾りけり
下京の船鉾町に白生地屋
丹後等引浜 二句
弘法麦穂立てて礁波が越す
老鶯や渚に消ゆる山の水

茄子の馬

— 工藤ミネ子 —

草刈るや朝日を散らし旭に濡るる
もじずりに屈めば風の背なに降り
動かねば吞まるる闇や蛩待つ
冠水のさざなみたてる穂孕み田
青大将雨後の屋敷を抜けきたる
はたと止みかなかな今日を終りとす
賑やかな端居となれり戌の刻
流星の太ふと願ひごとと忘る
七義姉逝く七 忌鐘の余韻へ油蟬
里よりの茄子が茄子の馬となる

山河集

同人作品



神蔵器選

大川の流れ 四万六千日 内藤 静

花川戸馬道ゆだち上りけり
照り陰る胸突坂やさるすべり
正論は一筋ならずところてん
ひまはりや柱時計が正午打つ

一の蔵茶房となせり釣忍 林 いづみ

土用太郎一日影をつれまはす
黄^{はま}権^{ぼん}の百花二百花沖に雲
合歡咲くや公園通りは海に尽く
渚橋をうしろすがたの白日傘

父の日のさびしき昼や酒買ひに 和田あきを

妻は言ふ鬼灯市の東京を
涼しさや父の木椅子に妻がゐて

訃へ急ぐ西日の中の電車かな
マンボウと遊んで夏の土佐路かな

蝌蚪を飼ふ約束しつば取れるまで 土井 三乙

日に三度目葉を差し桜桃忌
熱帯魚やはり乱視のありさうな
遇へば驚いつも横向き青田風
ビーチパラソル開き去年の砂こぼす

大川に水嵩増して我鬼忌かな 井上 あい

沖をゆく客船白し巴里祭
法隆寺の鐘聞き育つ金魚かな
四季問はぬ軸の一巻夏座敷
暮れてなほ燠になりたる凌霄花

◇特別作品◇(抄)

故郷

古川よし子

新涼の故郷訪うて父祖の墓
長崎忌時計止りし十一時
僧五十の追悼行脚原爆忌
原爆忌生き長らへて神に謝す
禅寺に鉄兜の碑魂祭
疎開児の草鞋を編みし敗戦忌
閉唐二句ざされし入母屋山門秋の雲
一対の明みんちよう調魚板花蘇鉄
赤とんぼ出島関門抜け行けり
海分かつ諫早干拓鱒雲

風土独語／神蔵器



大川の流れ 四万六千日 内藤 静

ご存知のとおり七月十日は観世音菩薩の結縁日、この目録音様に参詣すると、一日のお参りで四万六千日参詣した分のご利益があるといわれている。

作者は先ず浅草寺に参拝、その後、境内を埋め尽くす青鬼灯の店をめぐる、下町情緒をたっぷりと堪能、万太郎の「竹馬やいろはにはへとちりふ」の句碑をのぞく頃は、夏の長い日もようやく暮れて来た。

一般的にはこの辺で帰途に向かうのであるが、作者はいよいよ佳境に入る鬼灯市に心惹かれながらも、二天門を出て浅草橋から真直ぐ大川へ出た。そして吾妻橋を渡り、向島の三囲神社の方まで足を伸ばした。掲出句はその途中、隅田公園の岸壁に立って、浅草寺の方向を眺め、眼前に隅田の大河を見渡したのである。

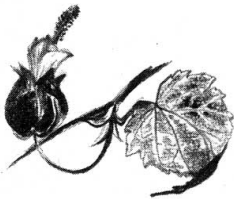
掲出句は「大川の流れ」の「流れ」の把握が平凡なようで非凡、盤石の重みと深みを持つている。大川はすでにとっぷりと暮れ、星一つない大空の下、ただ一色に黒々と流れ、公園の外灯や

街の灯に川面のゆったりとしたうねりの、その間の先端に白くきらきらりとささやくごとく小波が立っている。時折上下する水上バスが大きな水尾を引いて航ぎ、吾妻橋の出入が影絵のように賑わっている。広重の『江戸百景』の一枚を見るようである。

四万六千日は年に換算すれば百二十六年になる。この日を「欲日」と言われている。誰が言い出し始めたのか解らないがそんな身勝手な都合のよいことがある筈はない。しかし、私はこれは嘘や絵空事ではないと思っている。と言うのもたつた一日お参りすれば四万六千日分のご利益やお金が儲かるということではなく、観音菩薩と結縁、ご縁を結ぶことが出来るということであろう。そして一とたび結ばれたご縁は四万六千日、つまり死後も永遠に続くものと受け取れる。

広重は純真で感傷的な男でもあった。遺言状に「死んで行く地獄の沙汰はともかくも、あとの始末が金次第なれ」と自宅を売り払うよう書きのこしていたという。彼も観音さまと結縁を結んでいたようだ。

(以下略)



風土集



神蔵器選

梅雨明や等間隔の杉木立 津山 生田恵美子

おはぐるや人の間に水流れ

日盛へ見えぬとぼりを押し出

緑陰の地べたに降ろす絵の具箱

訃報かな青鬼灯の灯に濡れて

祇園会の真ん中抜けて夫の墓

コンチキチン四条通りの大暑かな

くたびれて町家畳にわらび餅

ハチ公前の人垣崩る大夕立

古希迎ふ話などして心太

月涼し河童橋より文を出す

ネクタイを締めて涼しくなりにけり

炎天や八重洲口より丸の内

落雷や舌にころがすウイスキー

猫の耳動き青柿落ちにけり

生田恵美子

ざぶざぶと手を喜ばせ茄子洗ふ 横浜 佐野つたえ
七月の母の百歳日を数ふ

亀の子山墳一荷

蟬時雨古墳の主を呼び覚ます

涼しさや古墳の上に木々育つ

大甕に三本の蓮花開く

七月の自転車を吊るウインドウ 川崎

少年の肩に竹刀や雲の峰 森田節子

竹炭を切り揃ふ音涼しかり

赤ん坊の初の寝返り金魚玉

念入りに磨く湯殿や日雷

水攻めの天秤櫓男梅雨 福生

根菜中堂 雨宮桂子

一隅を照らす法灯雲の峰

荒梅雨や坐して現在・過去・未来